

龍馬の愛した女

お
り
よ
う

新人物往来社

龍馬の愛した女

お

う



大内美予子（おおうち・みよこ）
昭和10年静岡県生れ。金城大学文学部中退。
著書『沖田総司』（新人物往来社）
『沖田総司拾遺』（新人物往来社）
『土方歳三』（新人物往来社）
現住所 名古屋市守山区松坂町183

龍馬の愛した女 おりょう

昭和五十三年四月五日 第一刷発行

著 者 大内美予子

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三―三―一（新東京ビルディング）〒一〇〇
電話東京（二二二）三九三一（代表）振替東京六一一五―六四三

印刷所 東京印刷

製本所 小泉製本

落丁本・乱丁本はおとりかえします



声が震えた。

「かまわん、家探ししろ！」

隊長らしい男が命を下した。あつと言う間に、土足の男たちは、家の隅々まで散って行った。

（誰も居てへんのに、あほな人たち！）

おりょうは、せめてそんな思いをこめて睨みつけていたが、

「氣をつけろ！ 不意に飛び出して来るかもしれんぞ！」

隊長は、おりょうの目の前で、意味もなくぎらりと刀を抜いた。

——これは、人を殺すものだ——

おりょうは、そのことを、はじめて切実に感じた。

刀は、龍馬とても、じやまくさそうにしながらも持ちあるいている、時々は、抜き放つて手入れもしているが——それを見てもおりょうはこんなふうに、人殺しの道具だという恐怖を、体で感じたことはなかった。

おりょうは、無意識のうちに、この男たちの中に、いつか逢った藤堂が混ってはいないだろうかと探し求めている。

藤堂でなければ、あの冷い表情をした男でもいい——たったあれだけの触れあいでも、無いよりはましで、人

間同志として口を利いた相手なら、突然、無体に突いたり斬ったりもすまい——と思ったからだ。

日頃、壬生浪に知りあいなどがあつては迷惑だらけにしか思っていないものを、人間というものは切羽つまると浅ましい……と、これは後になってからだ、おりょうは情なかった。

結局ここへ踏み込んで来た男たちの中には、藤堂も土方も見当らず、家探しをした連中は、何の成果も上げないまま半刻ほどで引揚げて行った。

その間、それこそ、魂の消えるような思いで、おていと抱きあつていたらしいおきみが、土間へかけ下りると、

「ぎちまる！」

と、悲鳴のような声をあげた。

仔犬は、土間の隅で口から血をたらして死んでいた。ぎちまる。

これは、吉村寅太郎が、まだこの家に居る頃拾つて来た仔犬だった。この近くの露地の奥に、吉丸稻荷という小さな祠があつて、そこに捨ててあつたのだという。

あまり、見ばえのしない、鼻のしゃくれたうす茶色のこの仔犬、おきみは喜んで可愛がった。

「おい、ぎちまる、」

第三章

海流かいりゅう

「世界には、いくらでも国があるぞ……オランダ、ベルギー・ポルトガル・安南……」

おりょうの知らない国を、いつも数え立てた龍馬もやはり、広い海のあることを、今考えていたのかもしれない。

終章

残花ざんか

おりょうは、松兵衛といっしょになってもやはり「炊ぎ奉公」はあまりしなかったようで、そういう点は、天の配剤というか、それほど苦にもせず家事をやってくれる男を夫に持ったということは、おりょうのしあわせであったかもしれない。

カバー・見返し 龍馬より乙女へあてた手紙

題字 白田江風

龍馬の愛した女

おりょう

第一章 黒船

(一)

おりょうにとって、一番古い思い出というとな何になるだろう……。

幼い日々を振り返ると、それはまるで、黄昏のうすくらがりの中へ、だんだん沈んで行ってしまう景色のようにおぼつかなく、いったいその頃の自分が、しあわせだったのかどうか、たしかめてみる手がかりもないような気がする。

ただ……おりょうの耳の奥に、かすかに残っているものに、手毬うたのひびきがある。

「わしの大事な、お手毬さあまは、

紙につゝんで、文庫へいれて

お錠^{じよう}おろして、お鍵でああけて、

開けたところは、イロハと書あいた、

……………

これは、丹波の山深いところから奉公に来ていた、まだ年端もいかないう下婢が、おりょうの相手をしながら歌ってくれたものだった。

その手毬うたを思い出すと、必ずそれにつられて浮んで来る光景がある。

その中のおりょうは、三つぐらいになっていたであらうか。

手毬をかかえて表へ出た……おそらく誰かが目を離したすきでもあったのだろう、小さなおりょうは一人だった。

うたを歌ってくれた少女の顔などは、とうに忘れてしまったのに、その時の手毬だけは、かがった糸のあてやかな色のとりあわせまでが目の中に甦^{よみがえ}って来る。

どういはずみか、その手毬は、おりょうの手を離れて、ころころとどこまでも転って行き、とうとうどぶの中に落ちてしまった。

(泣いたかしら？ その時……)

と、おりょうは思い返してみるのだが、定かではない。

そのうち、通りがかった誰かが、見付けて拾ってくれた——父のところへ治療を受けに来る患者の一人だったような気がする。

「さあ、早よう持^もっていて、お母はん^{はな}に洗^{あら}てもらいます、そしたらきれいになるさかい」

そんなふうに、おりょうを慰めながら渡そうとしてく

れたのだらう。

だが、おりようは、毬を見ると、かぶりを振って受け取らなかった。

「いらん、捨てて！」

泥によごれてしまったものを、どうして自分が受け取れよう……どんなに大切なものであったとしても……。

おりようは、自分が見捨てた美しい手毬のことを思い出すと、まるで人ひとりを裏切ったように、いつまでも心が痛んだ。

おりようの生い立ちの中には、そういったかすかな痛みを伴うような記憶がいくつか潜んでいる。

そういうものを、おりよう自身、たそがれ色の中へ塗り込めようとしていたのかもしれない。

ただし——世間一般として見れば、おりようの幼い日は、恵まれていたと言わねばならないだらう——殊に、この一家がやがてたどる運命を考えれば……。

おりようの父の檜崎将作は、下京の柳馬場通り三条下ルで、当時かなりよく流行る町医者だった。性格は、磊落、闊達で、人の面倒もよく見る方だったから、患家からも信頼され、病氣以外の相談もよく持ち込まれることがあった。

男としての魅力は、十分備えている人物だと言ったが、将作は、明らかに、醜男であつた。

それに比べて、母のおていは、誰の目から見ても際立って美しい女だった。公家の女によくある、薄がすみのかかったような顔の輪郭や、眉や目を持ち、その上、粧いから、身のこなしまで、いついかなる時も、どうしたら自分の美しさを最大限に発揮出来るかということ、心の隅から離れたことがない……といったところがあつた。

五条家に縁りのある身だということを何よりの誇りにしているのだが、遠い家系をたどればいざ知らず、さし当っては、その五条家に仕えていたという程度のことであるらしい。

だが、おていの生活感覚はすべてそこから出発しており、現在、町医者の女房であることには、大した満足も覚えておらず、自分のような階層のしかもこれほど美しい女が、将作のような男の妻になつてやつたということ、今もって恩着せがましく思っているふしがあつた。

妹のおきみが生れたのは、おりようが三つの時で、その下のおみつは、四年おいた七つの時だった。

二人の妹が出来てみて、おりようは、自分が妹たちに

も、母のおていにも、少しも似ていないことに気付いた。

自分だけは、この母から生れたのではないかも知れない……と思ったりしたが、それは、決して不幸な想像ではなく、たとえば物語の姫君の運命を自分に当てはめて見るというような……いわば空想の世界での遊びに近いものであった。

人々は、二人の妹のことを、

「ほんに、お母はんそっくりで……人形いちょうさんのように可愛らしこと」

と褒めたが、そっくりというのは、いくぶんの追従ついでが含まれていて、おきみやおみつが、おていに似た面ざしを持っており、十人並の器量であることはたしかだったが、とうてい母親の美貌には及ばなかった。

それを一番よく知っているのは、おていだったに違いない——おていが、普通の母親と少しばかり違うところは、娘たちが、自分の美しさを凌駕りやうしないことにむしろ満足を感じているらしいということである。

母親似であることを褒め言葉に使用しようのないおりょうについて、人は、

「おりょう嬢ぢやうはんは、せんせにお似やしたんやろか？」

と、ちょっと首をひねりながら、とりつくりい気味に言うのが常であった。

おりょうは、母や妹たちに比べると、やや色が浅く、濃くて形のよい眉と、まつげの長い大きな目を持った……いわば陰影のはっきりした顔立ちの娘だった。

おりょう自身は、小さい時、通りすがりの人が、何気なく、

「唐人の子おのようや」

と言ったのを聞いて、ひどく傷つけられ、以来、自分の顔立ちのことは、あまり考えるのは止そうとしたことがあった。

だが、だんだん成長するにつれて——女が自分の容貌について、無関心でいられるはずがなかった——こんどは、父親似だと言われることが気になり出した。

おりょうは、すでに、幼い日の自分が、いわれのない劣等感を持っていたことに気付いていた——母親の手鏡をのぞくたびに——自分は、自分なりに、美しいのではないかとこっそり考えるようになっていた。

しかし……そういう自分の判定を信じていいものだろうか？

鏡というのは、案外なまやかしもので、どんな人間にも、いい顔をして見せるものなのかもしれない……。

他人から見れば、自分は、父親そっくりの娘で、その美醜は、自から同類視されているのではあるまいか……。「おりょうは、男の子に生れればよかった、目元も眉も、女の子にしてはきつすぎるし、……それに性格かて……やっぱりお父はん似いなんやろ」

と母親までが、おりょうの胸の内に頓着なく言うのだ。

おりょうは、どちらかといえば、父親の方が好きだったから、よいいにどことなく後めたい思いをしながら、父親に似ていると言われることを、秘かな悩みのたねにしていた。

太一郎が生れたのは、おりょうが十歳の時だった。

将作は、男の子の授かったことを手ばなしで喜んでいが、太一郎の目鼻立ちに少し個性が出来かかって来ると、誰もかも一様に、

「この、ぼんは、せんせによう似といやすえ」

と言ひ、一層将作を有頂天にさせたが、その上皮肉なことに、この子のことは、

「女の子おにしたいような、器量のお子や」

とも、人は言った。

太一郎は、どことはっきり言いようはなくても、やは

り父親に似たおも、ざしを持っており……それにも関わらず、女の子にしたいような「美しい子供だったのである。

こんどは、鏡の中ではなく、おりょうにも、太一郎の美醜は、はっきり見分けがついた。

——似ている……私にも——

おりょうは、この弟のおかげで、目の前にかかっていたもやもやしたものを吹き払われたように——後から思えば、かなり滑稽な——不安から解放された。

おりょうは、父親とはまた違った、かなり自分本意な意味で太一郎の誕生を喜び、二人の妹よりずっとこの弟をかわいいと思った。

おていは、家事についての大きな采配はふるが、炊ぎ洗濯をはじめ、雑多な労働には直接手を下したことはなく、子供たちもある程度成長するまで、乳母まかせだった。

乳を飲ませると、容色が衰えると信じており、太一郎の時も、兼ねて手くばりして探しておいた——細っそりしたおていにくらべれば二倍もありそうな体格の——それに適しい立派な乳房を持った女が雇われて来た。

「おしんさんの赤ちゃんは？」

女は、子を生まなければ乳が出ないという知識を、お

りようはいつの間にか持っていた。

「ああ、うちの子おは、もう飯くうよってな」

おしんは、平気そうな顔付きで言って、

「あーあ、ここは極楽や、喰うて寝て、嬰兒さんに、乳当てごうとったらええさかい」

添乳でもしながら、おしんが寝入ってしまおうものなら、その胸の厚みに、太一郎が庄しつぶされはしないかと、おりようは心配になるほどだった。

ほんとうに、おしんは、よく寝る女で、

（寝ると乳の出しがようなるさかい）

というのがその言いわけだったが、おかげでおりようは、太一郎が一人で目を覚めている時を見つけては、存分におもひをしてやることができた。

おきみの生れた時、おりようはまだ小さすぎたし、おみつは、無事に育つかどうかと言われるほどひよわな赤ん坊だったから、妹たちについては、ほとんど抱いた覚えがないのだ。

おしんのところへは、時々十歳くらいの女の子が、二歳くらいになる男の子の手をひいてはやって来た。おしんは、その度に自分の着替えを入れておくつづらの中から、びっくりするほどいろんな食べものを出して子供たちを持たせ——その上、丈夫そうに齒の生え揃った男の

子を膝へかかえ上げて、そそくさと乳を吸わせるのだった。

おりようは、そういう光景に、妙に生ま生ましい親子を感じた。そして母親に乳を含ませてもらったこともない太一郎に、ふと哀れを覚えたりした。

(二)

おりようたちの育った家は、小じんまりした構えだったが、冠木門を入ると突き当りが玄関で、その左手が、十畳ばかりの、患者の待合室になっていた。

おりようは、小さい時から、

「あんまり、そっちの方へ行たらあきまへんえ」

と母に言われており、そこを通らなくとも表へ出られるようになっていたのに、時々、きゅうくつそうに坐っている人々の間を、わざわざ通り抜けてみたりしたものである。

ここへ来るのは、みんな、なにがしかの障りを持っているからで、誰もが心もとなげな様子で坐っており、只只、将作の診察を神妙に待っている……その余波で、小さなおりように対しても、ごく丁寧な視線が注がれるわけだが、それが、おりようの優越感を満足させるのだった。

二人の妹たちは、母親に言われなくても、待合室や診察室の方へは近づきもしなかったし、おてい自身も、夫の手助けをすることなど思いもよらず、同じ屋根の下へ、病人が出入りするさえうつとうしく、医者というのは因果な商売だぐらいにしか思っていないようだった。

太一郎が乳離れをし、おしんが暇をとって帰ってから、おりょうは、この子の面倒をよく見た。太一郎は疳の強いところがあつて時折母親を手こずらせ、

「扱いにくい子おや、一体誰に似たんやろ？」

と、暗におていは、それが、将作やおりょうゆずりでもあるかのような言い方をしたが、やがておりょうは、この弟が、父や自分とは、まったく違った性質の持主であることを知らされねばならなかった。

男の子の太一郎は、当然父親の跡を継ぐことになるだろう……だから、おきみやおみつが、無関心なのとは違って、この子の中には、自分と同じように、父親の職業に対する誇が育って行くものと思ひ込んでいた。

ところが太一郎は、そういう環境に対して無関心どころか、はっきりと拒絶反応を示したのである。

はじめて、それに気付いたのは、太一郎の手を引いて待合室を通り抜けようとした時だった。太一郎は、いくぶん様子の違う人の群を見ると急におびえて後じさり

し、いつも、割とおりの言うことはよく諾く子なのに、廊下の途中で、何としても動かなくなってしまったのだ。はじめは単なる人みしりかと思っていたのだが、太一郎はだんだん大きくなってからも、治療部屋の方へはぜったい足を踏み入れようとはしなかった。

将作は、内科が専門だが、そこは町医者のことだから、時には急な怪我人が搬び込まれて来ることがある。そう広くはない家だからそのけはいは奥まで伝わって来る。おきみやおみつでさえも、大して顔色を変えたりはしないのに、太一郎は、そのけはいだけで、震えながら、おりょうの袖にしがみつくのだ。まして、傷の手当の途中、悲鳴や呻き声でも聞こえてこようものなら、雷嫌いが、稲妻や雷鳴の真下にでも居るように、身の置き場もなく、うろたえ騒ぐのだった。

血を見ることをこわがることは、病的といつてもいいくらいで、自分の指の先などに、針でついたほどの傷をつくつても、今にも氣を失いはしないかと、傍の者が心配するほどだった。

おりょうは、太一郎を可愛がっているだけに、情なくて、いろいろ言いきかせてみるのだが、いざとなるとやはり駄目なのだ。

将作は、男の子が生れた時の喜びが大きかっただけ

に、太一郎の意気地のなさには、すっかり落胆してしまつたようで、

「男の子のくせに、不甲斐ない！ そんなことで、医者になれるか！」

と叱りつけ、太一郎は、父親の権幕に、ますます、おびえ切つてしまい、おきみたちまで、つられてベソをかぐといったありさまで時として家の中が穏かならぬ状態になつた。

おていは、太一郎のこういう性癖についてそれほど深く心痛するふうもなく、

「こんな小さな子おに、今からそうきつうに言わはらんかてよろしやおへんか」

と、むしろ将作が、やかましく言うことを非難するような口ぶりをした。

将作にしたところで、医者を継がせるかどうかという以前の問題として、これでは男の子として困ると思つて言っているわけだが、

「太一郎は、医者なんぞにせんでもよろしおすえ」

と、ある時、おていは得々として言つた。

こういう言い方を夫がどう思うか、おていにはそのへんの斟酌がまったくない。

「この子には、稀有な才能がおすよつて……」

おていが見つけ出した、太一郎の才能とは、香を聞くことであつた。

おていは、公家ふうの様々な生活習慣を、この家の暮りの中へも持ち込んで来たが、将作は、自分があまり関りあいになえなければたいいのことは、おていの思うままにさせていた。

香をたしなむというののもその一つで、おていは時折、まるで鑑道具のように小さな、香錠とか、香槌とかいつた、香拵（かじけ）の道具を持ち出しては、娘たちにお相伴させて香を聞いた。

煩雑な作法は、おていもあやふやだったらしいが、こういう高級な遊びが出来るということ自体が、おていの好みを満足させていたようだ。

おきみやおみつなどは柔順に母親の道案に付き合っていたが、おりょうは、こういう単調で、しかもおそろしく時間のかかることは性に合わず、いつでも、早く一通り終らないかということばかり考えていた。

まだしも、お茶や、お華の方が、なにがしかの手応えがあつて、習い甲斐があるような気がするのだ。

太一郎は、五才になつていた。

おていも、まだ、太一郎に、無理に香を聞かせてみようとしたりわけではない。

いつも、女のきょうだいの中に混っておとなしく遊んでいるのだが、この時も、見よう見まねで、香炉を鼻の下へ当ててみる太一郎のその格好が、いかにも、もっともらしくおもしろかったので、ほんの座興のつもりで、仲間に入れてやり、作法通りに、一の香、二の香……と、五の香まで、聞かせてみたのだ。

すると、太一郎は、試香の何番目か、本香であるかを、びたりと当てたではないか。

まぐれ当たりかもしれない……と何度ためして見ても、結果は同じだった。

「紅葉」とか「時雨」とかいう香名で教えても、二種以上の組香でも、太一郎は聞き分けることが出来た。あまり、身を入れたことのないおりょうなどの及ぶところではなかった。

おていは、太一郎のこの貴族的な趣味に於ける才能に狂喜した。

それまでおていは、どの子供に対しても、親馬鹿ぶりだけは見せたことがなかったのに、にわかに、太一郎に對する態度を変えた。

「梅檀は双葉より芳しいいますさかい、この子は、必ず香道の大家になりますえ」

「ばかな、木片を燃やして香を嗅ぐくらいのことでは、

生活がなり立つものか」

と将作は言ったが、香道という高貴なたしなみに對し「木片を燃やす」などという分り方しか出来ない夫を、おていは明らさまに、憐憫の目でしか見なかった。

「あなたは、香道の宗匠が、公家方ではどないに丁寧なもてなしを受けておいやすか、ご存知やおへんさかい……」

だが、実際にはこの衰微の一路をたどっている精神的な趣味で、身を立てて行くことが出来ると考えているおていの方が、呆れるほどの世間知らずだと言わねばならないだろう。

「とにかく、私では、この子を教え切れまへんさかい、よいお師匠様を探さんとあきまへん……何なら、御所様にお願ひに上つてみても、ええのやけど……」

おていが、「御所様」と呼ぶのは、昔仕えていた頃の五条家の当主のことだが、今では代替りもしていることだし、事実上、出入りは途絶えている……だが、おていは、それを認めたくはないらしく、

「ほんまいうたら、宮中の香の司は、三条様やさかい……あなたに、そちらの心あたりでもあったら……」

早急に、その道で權威のある師を見付けて下さらぬかと将作に言った。

将作が、このことに賛意を持っているかどうかということは、心の端にも留めてみないのか、一旦、自分がこうしたいと思ひ込んでしまうと、おていは、無邪気なほど、強引だった。

勿論、自分が見出した、太一郎の才能をのぼしてやりたいと思っていることもたしかだが、まずは、息子が香を聞くところを、誰かその道に堪能な人に見せびらかし、感嘆させてみたいという欲求が、おていを強く動かしているようでもあった。

この時も将作は、何のかのと言いながらも、

「まあ、稽古事というならよからう、何ぞ、得意なものでも出来れば、ちつとは気の弱さも直るかもしれん」と、結局はおていの言う通りに、香道の師を探すことを約束させられた。

おりょうは、時々、自分の父母ながら、おていの際限のない気ままさと、それに応じた、将作の際限のない寛大さに、一種の感嘆すら覚えることがあった。

父の為に、それは、齒がゆくもあったが、女一人くらいは、自分の世界の中で、たぶたと泳がせておく、父の大きさが、おりょうには頼もしくも思えた。そういう父の値打を果しておていが、どれほど認めているかということになる、おりょうは、同性としての母を、多少

憎らしく思わずには居られなかったが……。

(三)

将作が、おていと太一郎のために、香道の教授をたのんだのは、烏丸下長者町に住む、儒医の池内陶所という人物であった。

医者といっても、陶所は将作のような町医ではなく、むしろ儒学者といった方が通りがいいかも知れなかった。正親町三条実愛、中山忠能などの公家方とも関りが深いらしい。

将作は、青蓮院出入りの医師でもあった。無論、宮家の侍医というような身分ではない、勤仕する下級の者たちを診るのだが、とかく堂上方は、お手許が苦しいから、時によると定められた格式の医師をたのむより、将作程度の者の調剤で済まされることが、無いとは言えない——そんなこともあって、将作は、公家方にもいくぶんかの伝手を持っていた。

池内陶所とのつながりも、そのあたりで出来たものだが、この男は、方々の大名家とも交流があるらしく、はつきりいって、将作にも、その正体があまりよくは分らない。

陶所は、御香所職、三条西実隆の御家流の流れを続く

者だと称し、

「ふつうは、こちらから出向いてご指南申し上げるということはしておらぬが……」

他ならぬ、布田殿のお口利だから、と、青蓮院宮家の執事の名を挙げて、勿体をつけた。

おていは、いちいち、それをありがたがったが、陶所は、見た目だけからいえば、大して風采の上らぬ小男で、おりょうは、最初逢った時、

——まるで、ねずみのようだ——

と思ひ、以来あまり敬意を払う気にもならなかった。

風采はどうであれ、陶所は、香道は勿論、たしかに、おていや太一郎の相手をさせておくにはもったいない豊かな学識を持っていた。

おていが、あれほど期待をかけた太一郎の方は、たしかに五才にしては、利発な方ではあったし、読み書きもいくぶんかは出来るようになっていたが、別に、香道という風雅の道に興味を持ったわけでもなく、匂いに対する感覚は、才能というより、体質、というべきものだろう。

この敏感すぎる男の子は、嗅覚も異常なまでに鋭かったというにすぎない。

だから、陶所が、香元手前の礼儀作法をやかましく言

ったり、香組と文学との関連を説いて、和歌を詠む心で、香を焚くことなどと教えても、只、たいくつするだけのことであった。

おていは、太一郎が、匂いを嗅ぎわかることに長じているというだけで、まるで手箱の底から珍奇な宝珠たまたまでも拾い出したように、大騒ぎをしたのだが、どうやら、池内陶所の、正統派お家流香道に出くわして、そのややこしき、めんどろくさに、途方に暮れたかっこうになった。

たとえば、「一声を、あかずも月に鳴きすてゝ天の戸渡る時はとよす鳥かな」などという和歌を、香木で表現すると言われても、おていの理解の外なのである。

それとは、反対に、陶所の方は、はじめは、月に一回でもという約束をしぶしぶ引き受けたような形になっていたにも関わらず、何らかの口実を設けては、頻繁に檜崎家へ出入りする習慣が身についてしまった。

おそらく、それは、おていの美貌と関りがあったに違いない。

おりょうは、いつも、ほんの少しばかり意地の悪い目で、母親にはじめて逢う人間……それも特に男……を見るくせがついていた。

将作にも多分にそういうところがあったが……、男た